

2024 年度・研究ユニット活動報告書

「環境と社会に関する地理学的実践」

安食和宏（代表）、谷口智雅、森 正人、北川眞也、朴 恵淑

本研究プロジェクトでは、環境と社会に関する地理学的分析と実践に関する基礎的・応用的研究を進めてきた。また地理学的な知見を基にした大学教育の方法論についての実践と考察を行った。2024 年度の活動の概要は以下の通りである。

1. 環境に関する調査研究として、谷口は、自然環境と人間活動との関わりを明らかにするため、昨年度に引き続き滋賀県の愛知川と琵琶湖を対象に、河川水質調査と土地利用景観の調査を行った。そして朴は、従来の実践活動を継続して、三重県地球温暖化防止活動推進センター長として地球温暖化防止活動に取り組み、三重グリーン購入ネットワーク「三重 GPN」の代表幹事（会長）として産官学民の連携活動を進めた。

2. 社会との関わりをテーマとした活動として、北川は、一般社団法人デサイロと UnlocX によるオンライン講演会「FoodScopes: 人文・社会科学の視点から、新たな『食の価値循環』を探究するプログラム」（2025 年 3 月）の講演を務めた。担当は、「ロジスティクス／インフラ／食」と「食と「(ジオ・) ポリティクス」——国家はいかにして食を規定するのか？」である。また安食は、紀宝町まち・ひと・しごと創生会議の会長を務め、こうしたまちづくり活動の推進における地理学研究の貢献のあり方について考察した。

3. 大学教育における実践として、森は、2024 年 11 月に、沖縄県北部の NPO 法人エコネット美の主宰するプログラムに学生 3 名を引率して参加した。ここで、沖縄県北部の自然環境のなかで人びとが生活してきた様式を調査した。また谷口は、環境中心の教育的実践として、水環境と地形と土地利用の関係を主なテーマとした巡検を実施した。対象地域は、四日市市（5 月）、名古屋市（6 月）、および浜松市（7 月）である。さらに、研究ユニットのメンバーが集まり、2024 年 11 月に「人文学部・環境文化専修学生による卒業論文中間報告会」を開催した。当日は、日本、アジア・オセアニア、ヨーロッパ・地中海、アメリカ、および自然環境論研究の学生たち 15 名が対面で公開研究発表を行い、教員達が地域を越えて合同の指導を行った。こうした実践を通して、地理学の専門的な教育効果を高める方法論について検討した。以上のように、2024 年度は、特に地理学分野における大学教育の方法論について、様々な取り組みを進め、考察を深めることができた。

以上

研究ユニット名称：齋宮文化研究ユニット
研究ユニットのメンバーの氏名：亀田夕佳、内藤英子
今年度の活動報告： 「齋宮文化研究ユニット」は、伊勢齋宮で行われた文化的行事である『齋宮良子内親王貝合日記』を取り上げ、海浜都市である伊勢の特性がどのように取り入れられ、いかに表現的達成を成し遂げているのかを明確にすることを課題として取り組んできた。 今年度は、2023 年度の続きとして和歌 30 から 40 までを取り上げて考察し、注釈作業を行った。研究会は Zoom で開催した。 6 月：和歌 30～35 の注釈作業の報告を行った。 9 月：和歌 36～37 の注釈作業の報告及び、日記部分前半の見直しを行った。 11 月：和歌 38～40 の注釈作業の報告及び日記部分後半の見直しを行った。 3 月：注釈の見直しとまとめを行う 今年度の注釈作業を通して、明らかになった成果は以下である。 ① 「長浜」は、一般的に「長／永」をいうものであり、「真砂」と結びつけられる傾向があるが、本作品では「貝／甲斐」と結びつけられている点が、他には見られない特異性として指摘できる。 ② 「二見浦」は、「蓋身」との掛詞として用いられることが一般であるが、本作品では海浜の夜明けの明るさと結ばれ、それが「貝／甲斐」を導く初出として指摘できる。 総じて、本作品には伊勢の海浜の風景を言祝ぐ表現が数多く用いられており、十二歳の齋宮良子内親王に捧げられた心尽くしの行事だと読み取ることができた。 今年度の研究成果の一部は、「予祝の海浜——『齋宮良子内親王貝合日記』の和歌表現——」（『人文論叢 三重大学人文学部文化学科』第 42 号）として発表した。